

よしつねせんぼんざくら
義経千本桜

みちゆきはつねのたび
道行初音旅

恋と忠義はいづれが重い、かけて思いははかりなや忠ちゆうと誠まことの武士もののぶに、君が情けと預けられ、静かに忍ぶ都をば、後に見捨て、旅立ちて、作らぬ形なりも義経の、御行末は難波津の、浪に揺られて漂ひて。今は吉野と人伝ての、噂を道のしほりにて、大和路さして慕ひ行く

谷の鶯な、初音の鼓く。調べあやなす音につれて、連れてまねくさ

遅ればせなる忠信が旅姿。背せなに風呂敷を、しかと背せたら負おふて、野道畦道ゆらりく、軽い取りなりいそくと

「目立たぬ様に道隔て、女中の足と侮あなどつてさぞお待ち兼ね。こゝ幸ひの人目なし」

と、姓名添へて給はりし、御着長おんきせながを取り出だし、君と敬ひ奉る

静は鼓を御顔と、よそへて上に沖の石

「人こそ知らね西国さいこくへ、御下向の御海上、波風荒く御船を、住吉浦に吹き上げられ、それより吉野にまします由、やがてぞ参り候はん」

と、互ひに形見を取り納め

雁と燕はどちらが可愛、やゝを育つる燕が可愛、花を見捨つる雁金ならば、文の便りもまたの縁、エ、さうぢやいなく。

諷ふ声々面白や

「実にこの鎧を給はりしも、兄つぎのぶ継信が忠勤なり」

誠にそれよ来し方の、思ひぞ出づる壇の浦の、海に兵船平家の赤旗、源氏の強者。『あら物々しや』と夕日影に長刀ながなたを引きそばめ、『何某なにがしは平家の侍、悪七兵衛景清あくしちびょうえかげきよ』と名乗りかけ、薙なぎ立て薙なぎ立て薙なぎ立つれば、花に嵐の散り、ぱつとこの葉武者、『云ひ甲斐なしとや方々よ、三保谷みおのやの四郎これにあり』と渚に丁ど討つてかゝる。刀を払ふ長刀の、ゑならぬ振る舞ひいづれとも、勝り劣りも波の音、打ち合ふ太刀の鏝つばもと元より、折れて引く汐帰る雁。勝負の花を見つるか、長刀小脇ながなたにかい込んで、兜しころの鍔つばを引つ掴み、後へ引く足よろ／＼、向ふへ行く足たぢ／＼、むんずと鍔つばを引つ切つて、双方尻居しりいにどつかと座す。『腕の強さ』と云ひければ『首の骨こそ強けれ』と『ハ、ハ、ハ、ハ、』
『ホ、ハ、ハ、』笑ひし後は入り乱れ、手繋ぎ働き兄継信、君の御馬やまの矢面やまに駒を掛け据ゑ立ち塞がる。

「ヲ、聞き及ぶその時に、平家の方には名高き強弓つよゆみ、能登守教経のとのかみのりつねと名乗りもあへずよつ引いて、放つ矢先は」

「恨めしや、兄継信が胸板にたまりもあへず真逆様」

あへなき最期は武士の、忠臣義士の名を残す、思ひ出づるも涙にて、袖はかはかぬ筒井筒、いつか御身ものびやかに、春の柳生の糸長く、枝を連ぬる御契り、などかは朽ちしかるべきと、互ひに勇め／＼られ、急ぐとすれどはかどらぬ、芦原峠かうの里、土田六田も遠からぬ、野路の春風吹き払ひ、雲と見紛ふ三芳野の、麓ふもとの里にぞ